

『探検』試論

小野龍弥

—— 学 生 探 検 ——

当今「探検」という言葉の範囲を考えてみるに、一つはヒマラヤ登山であり、一つは人文学にバックアップされた学術調査であり、前者はスポーツアルピニズムの旗印の下になされ、後者は學者の机上に起聚せられるものである。これら単なる登頂が目的のものは探検とはいさゝか異質のアルピニズムの所産であり、又何万年も前のガイコツを拾うために進む道なき道は學問のためのものである。従つて人文的探検は特定の學者でなければ何ら意味がない。

過去未來に通じて「探検」とはどのようなことに結論づけられるのであろうか。それはヒマラヤ登山及び学術調査を超越した、ひとつの精神的なものではなからうか。登山が何のためなされるのかという議論が尽きるところがないと同じく、それをやらなければ自分の存在価値がないという本能に動かされてなされるものが「探検」ではなからうか。そしてその底に流れるものは開拓精神である。

「人跡未踏」と聞いたならば、もうがまんできず、勇然とそこへ出かけてゆく——何のためでもない、科学のためでもない、名誉のためでもない——只それをやらなければ、自分というハーモニーが乱されるのである。常に真赤な血と燃えた開拓精神が自分の生きる信条でさえあるのだ。これが「探検」ではなからうか。

「学生探検」は人文的とか何とか理屈の存しないところに純粹性を見出し、人跡なしときけば「よし俺が足跡を残してやる」の意気が常になければならぬ。こういう態度をとるならば、我國にもまだまだ小さくとも多くのルートが見出さるであらう。海外遠征のみならず、自ずと道が展げてくるにちがいない。そうする内に真に海外遠征が自分にとって、なくてはならないものになるであらう。

この開拓精神が已に欠けていると思う輩は、さっさと探検なんてことをよす方が賢明である。

今や、地理的探検は減び、人文的探検のみが残された道であると言われている。実際に人文的探検は多くの成果をおさめ、探検史上にも大きな足跡を残しつつあるが、そのいずれもが高度な学問的要素に裏付けされていることが特徴と言える。さらにその探検メンバーとなる人は一生を学究に捧げている人である。

我部においても、現代の探検界を反映して人文的探検について語り、その道を行かんとする風潮が多く見られる。僕はそれに真っ向から反対するものであることは部員諸君は承知と思うが、更に言うならば、反対と同時に輕べつしている。人文的探検を輕べつすることは出来ないが、君達を輕べつすることはたやすい。何故ならば君達の語る人文的探検には何ら学問的な裏付けがなしないことにある。高度な学問は大学四年間では成しうる筈がないから、自介達の實力の範囲でやるのだと君達は語る。それも一つの理屈であるが、僕の輕べつ論は次に述べる点にある。人文的探検に欠くことの出来ない「学究」に関して君達は何ら熱意を示さず、将来の夢はいい会社に就職することのみあり、一つの例は、大学院にとがまってまで学問に打ち込もうとしないことである。それで果して将来に於いて大きな人文的探検を成しうるとでも思っているのか。君達が人文的探検を擁護するのは、「容易である」ということである。君達が海外遠征をもくろむのは、只見聞を広げたい欲望以外の何物でもない。そこには探検という香り高い精神は必要としない。見聞を広げるためのスタンスとして探検部を遊人だに置ぎない。仮に海外遠征を成したといえども、それは学者の召使いの如き者であり、探検の自発精神はどこにも見られないだろう。部に於ける四年間を苦勞せずして送り、名跡のみを錦の御旗とかがけて海外旅行を夢見ているのである。これを輕べつし反対しないことが出来るだろうか。

探検の精神は今や忘れられようとしている。人文的探検は今後の探検界に残された課題であるにもかゝらず——である。

——— 冒険は探検である ———

「現代は人命を尊びその安全の爲にあらゆる手段がなされる時代である。全ての人々はその安全の中に守られ、危険を感じることはなくなってしまった。故に少しの危険にも足がすくんでしまうのである。」

過去に於ける探検史の中で生命に危険を感じることなく、その探検を成し終え

た人があったとしたら僕に教えてもらいたいものだ。地理的、人文的、探検と言われるが、後者は特定の学究者でなければ出来ない。所謂開拓精神に燃えた探検家は、地理的探検の減少に伴って消えてゆかねばならぬ運命が近づいている。アフリカ、南米、南極、大陸全て過去にのみ探検は存在した。残された区域——それは最も高度な技術を要するヒマラヤ山系のみである。この世界だけは多くの謎を秘めていることは承知だろう。現在までヒマラヤで登頂をかちとった者は、ほとんど登山家達による探検である。故に偉大なる登山家こそ現代の探検家といっても誤りでない。今後の探検家たる者はその前に立派な登山家でなければならない。南極大陸へ渡るには航海技術を要した如く、ヒマラヤに於ては登山技術が必要である——この様に探検型態は変遷してゆくのである——。

ヒマラヤとの闘争中には過去の大探検家と同じく幾多の生命が失われている。国内に於ける登山でさえもその遭難は多い。危険とわかっておりながらも登るのである。それは理屈のつけ難い本能以外の何物でもない。命を的にやることは冒険と呼ばれる。この冒険のないところに探検は存在しない。探検家たろうとする者は先ず立派な登山家になることを急務におかなければならぬ。そこに現代の探検家たる資格がある。但し人文的探検を目指す者はこの限りではなく、それは僕の論ずるすべのない異質なものである。